Mrs. Dalloway における音と風景

本　岡　典　子

はじめに

Mrs. Dalloway は六月の London のある一日を時間の大きな枠組みとして主人公 Clarissa Dalloway を中心に展開する。登場人物は多く、物語も Clarissa と Septimus という、年も社会的地位も異なり、直接全くかかわりあうことのないはずであった二人を中心に、意識、感覚、感情、追憶、情景などが切り替わり、つなげられ、元に戻る。時間の枠、そのものも追憶や未来の想像を含んで、果てしない広がりを持っている。

情景描写におけるイメージの多用と、鐘の音をはじめとしたさまざまな音の効果は、小説構成に必要不可欠の要素である。登場人物の意識に浮かぶ情景は、現実の London であったり、また追憶の Bourton であったりするけれども、これらは単なる背景ではなく、感情のこまやかな揺れまで映した心象風景である。本論では、心象風景をあざやかに伝え、ばらばらの情景に統一感を与える個々のイメージの分析と、心象風景に入り込んで物語を展開させる音の働きについて考察を行う。

1．四種のイメージ

Clarissa が自ら主催するパーティに花を買いに行く場面からこの小説は始まる。

> ...The doors would be taken off their hinges; Rumpelmeyer's men were coming. And then, thought Clarissa Dalloway, what a morning – fresh as if

issued to children on a beach.

What a lark! What a plunge! For so it had always seemed to her when, with a little squeak of the hinges, which she could hear now, she had burst open the French windows and plunged at Bourton into the open air. How fresh, how calm, stiller than this of course, the air was in the early morning; like the flap of a wave; the kiss of a wave; chill and sharp and yet (for a girl of eighteen as she then was) solemn, feeling as she did, standing there at the open window, that something awful was about to happen; looking at the flowers, at the trees with the smoke winding off them and the rooks rising, falling; standing and looking until Peter Walsh said, 'Musing among the vegetables?' – was that it? – 'I prefer men to cauliflowers' – was that it? He must have said it at breakfast one morning when she had gone out on to the terrace – Peter Walsh. (5-6)

今、外れてしまいそうなドアのちょうつがいからの連想も手伝って、Bourton で窓を開け、ちょうつがいのきしむ音を聞いた記憶が呼び起こされる。さらに Bourton の思い出において最も印象深い人物の一人、Peter Walsh を思い出すのである。

現実の風景や過去の記憶の断片が Clarissa の感情に重ね合わされ、心象が浮かび上がる。はっきりと意識された対象だけでなく、漠然とした印象までそのまま繊細に描き出すことによって、作品に日常のリアリティが生まれている。さまざまな印象や、その印象が喚起した、感情や過去の記憶などを意識するままに描こうとした Woolf であるが、用いるイメージには特徴がある。古代から自然を火、空気、大地、水の四元素に分けてとらえる考え方があったが、これを用いて、*Mrs. Dalloway* におけるイメージの特徴を分類、検討していく。

まず、火のイメージは恐怖の表現として用いられることが多い。Septimus にとって、世界が燃えるように思えること (18) もあれば、自分が炎の中に落ちていくように感じることもあった。鋭敏な感受性から生まれた、恐怖を

映す心象である。

> And he would lie listening until suddenly he would cry that he was falling down, down into the flames! Actually she would look for flames, it was so vivid. But there was nothing. They were alone in the room. It was a dream, she would tell him, and so quiet him at last, but sometimes she was frightened too. She sighed as she sat sewing. (155)

Septimus の幻想ではあるけれども、実感に近いくらい生々しく感じられた幻想である。傍にいた Lucrezia は夢だと彼に言い聞かせる一方で、あまりの様子に自分も恐ろしくなってしまう。こうして再度繰り返される幻想に二人とも疲労していく。

また火の比喩による恐怖は、Septimus だけのものではなく Clarissa も恐怖によって自分が炎に焼き尽くされるかのような感覚を抱く。自分が一生懸命準備してきたパーティーが失敗したのではないかとの恐れからである。

> Why, after all, did she do these things? Why seek pinnacles and stand drenched in fire? Might it consume her anyhow! Burn her to cinders! (184)

刹那、おぼえた強烈な恐怖は、炎に自分が焼かれる想像まで引き起こす。パーティのさなか Peter に批判されているのだと思うと、表面的には客に話を合わせながら自己を燃やしていると思うくらい必死になっている自分自身を客観的にとらえて、空しさを覚える。このように火のイメージは、火の特質そのままに、燃え上がるように激しい感情を視覚化している。

空気のイメージはブラインドがはためく様子で表現されている。面白いと評判の昼食会に夫だけ招かれ、自分は招待されなかったことにショックを受けた Clarissa は、窓を開けてブラインドを揺らす風、犬の鳴き声などに 6 月の朝を感じながら、失望感に沈む。爽やかな朝の風を受けて、自分の寂し

さが余計に実感として迫ってくる。窓を開けて外の空気を取り込めば取り込むほど、逆に自分の衰えを感じるのである。

> She began to go slowly upstairs, with her hand on the banisters, as if she had left a party, where now this friend now that had flashed back her face, her voice; had shut the door and gone out and stood alone, a single figure against the appalling night, or rather, to be accurate, against the stare of this matter-of-fact June morning; soft with the glow of rose petals for some, she knew, and felt it, as she paused by the open staircase window which let in blinds flapping, dogs barking, let in, she thought, feeling herself suddenly shrivelled, aged, breastless, the grinding, blowing, flowering of the day, out of doors, out of the window, out of her body and brain which now failed, since Lady Bruton, whose lunch parties were said to be extraordinarily amusing, had not asked her. (35)

また、Clarissa は、ブラインドがパタパタいう思い出 (47) でもって、二人の思い出の地 Bourton のことを切り出した。風に鳴らされるブラインドは Clarissa にとって、Bourton の思い出と強く結びついているように思える。こうして風はさまざまな印象を緩やかにつないで吹き寄せる。

他方、パンクした車が通り過ぎる場面では、街をすり抜けていく風によせて、あたりの様子がざっと描かれる。

> A breeze flaunting ever so warmly down the Mall through the thin trees, past the bronze heroes, lifted some flag flying in the British breast of Mr. Bowley and he raised his hat as the car turned into the Mall and held it high as the car approached; ... (23)

ある瞬間街にいあわせたというだけで、それぞれがまるで関係のない通行人や周りの光景を描写するのに、風のイメージはカメラが情景を映すように断片を拾い上げ、効果的に働いている。

飛行機も空気のイメージを担った描写といえる。戦後のことでもあり、飛

行機は戦争や死を連想させ、注意をひくものであるが、実際に飛行機が空中に描いた文字は菓子の宣伝で、平和なものであった。この飛行機の出現によって街頭の人々はみな空を見上げ、自分なりの解釈を行う。

> Suddenly Mrs. Coates looked up into the sky. The sound of an aeroplane bored ominously into the ears of the crowd. There it was coming over the trees, letting out white smoke from behind, which curled and twisted, actually writing something! making letters in the sky! Every one looked up. (23)

一瞬ではあるが飛行機によって、不特定多数の人間の注意が一点に集中する。大勢か一人の意識かの違いはあるが、一人の人間の雑多な印象をまとめる風のイメージの効果と、意識や印象の統一・集中という点において共通するものがある。

一方で大地のイメージはそれほどない。街を歩く Peter の気をひいたのは、大地からわきでているかすかな音であった。Clarissa の邸を辞して、これまでのことを思いおこしながら歩いていると、老女の声が考えをさえぎる。

> A sound interrupted him; a frail quivering sound, a voice bubbling up without direction, vigour, beginning or end, running weakly and shrilly and with an absence of all human meaning into
>
> ee um fah um so
> foo swee too eem oo –
>
> the voice of no age or sex, the voice of an ancient spring spouting from the earth; ... (90)

年も性別もない、意味のない太古の声が大地から湧き出す[1]と感じているのである。Peter は、老女が過ごしてきたであろう時を思い、更に遥か太古への想像を現在の London に重ね、失われたものへ思いをはせている。

一方、水のイメージは多い。街の雑踏の中、車のパンクによって周囲の人々の耳目を集めた車に乗っていた人物が、総理大臣かどうかは定かではないにしろ、とにかく偉い方であったという事がもたらした心理的なさざなみが、水のかすかな揺らぎ、波紋のイメージに重ねられている。

> The car had gone, but it had left a slight ripple which flowed through glove shops and hat shops and tailors' shops on both sides of Bond Street. (20-21)

こうして生まれた波が、この後計測できない些細な何かとして遠く中国まで伝わるという。劇的に大きなものではないが、ささいなことが静かに深く、いわば無意識的な伝播として人々の間に広がっていく感覚が表現されている。パンクの場面に直接立ち会った人々に、さまざまな想像や推測の契機を与えたこの出来事の衝撃は、ぱっと立ち消えるのではなく遥か遠くまで広がって、力を弱めながらも伝わっていく。

また、Clarissa は昼食会に招かれなかったショックから心の奥深くで、自分をオールで揺らされる川底の植物のように感じる。

> "Fear no more," said Clarissa. Fear no more the heat o' the sun; for the shock of Lady Bruton asking Richard to lunch without her made the moment in which she had stood shiver, as a plant on the river-bed feels the shock of a passing oar and shivers; so she rocked; so she shivered. (34)

ショックを受けて、その衝撃のままに Clarissa がただ揺れ震えることしかできないという感覚が、水のイメージの持つ、死につながる根源的な恐怖[2]ともあいまって視覚的に表された一例である。このように水のイメージによって描写される恐怖は、先ほどの火の恐怖同様に、Clarissa だけでなく Septimus にも訪れる (77)。心理学用語でいう Double とされる、二人の繊細な感覚の類似が見られる。

他にも、コップから水があふれる様子が比喩として用いられている。

> The cold stream of visual impressions failed him now as if the eye were a cup that overflowed and let the rest run down its china walls unrecorded. (181)

視覚的印象がコップから溢れる水のように流れ出ていく、という実感が読者にも鮮やかに映像として伝わってくる。これはPeterがClarissaのパーティーに参加するため、彼女の家の前に立っている際の描写である。屋敷に向かう途中、彼には、Londonは水に浮かんだ都市のように思え、招待客を乗せたタクシーは水上を走っているかのように映る。自分と他者との間にあいまいなヴェールを感じ取ってあたりを見回しているかのように、Peterの認識において、水のイメージが外部の存在に重ね合わせられている。ぼんやりした、印象とも幻ともつかないこうした情景を脳裏に浮かべていたPeterは、このあと目覚め、ようやくパーティーの会場に入っていく。

Peterの心象風景は、他にも水のイメージを用いて表されている。以下は魂についての彼の考えである。

> For this is the truth about our soul, he thought, our self, who fish-like inhabits deep seas and piles among obscurities threading her way between the boles of giant weeds, over sun-flickered spaces and on and on into gloom, cold, deep, inscrutable; suddenly she shoots to the surface and sports on the wind-wrinkled waves; that is, has a positive need to brush, scrape, kindle herself, gossiping. (177)

魂は魚のように深海で泳ぎまわり、冷たく深い、計り知れぬ暗闇に向かう。そして時に飛び上がり波間にたわむれる。たいてい深海のような場所を動き回っている魂は、たまにとびあがり、例えばおしゃべりのような、何かをしたいという欲求をおぼえるというのである。

先ほど言及したように、視覚的印象が水の流れとなって認識するという感

覚、魂が海にあるという思想、どちらも水のイメージによって表現されている。意識の対象となったさまざまな印象も、それらを意識する魂も同じイメージで表現され、個々の印象をつなぐ意識そのものを表現するのに、水のイメージは重要な働きを担っている。

さらに水のイメージは、人それぞれの印象、感情をつなぎ、統一感を与えている。人物個々の情景や場面をつなげるという効果は、風に乗せて次々に対象を描写していく空気のイメージにおいては見られたが、他のイメージにはあまり見られない。以下の引用では、波の比喩でもって Richard と Clarissa、それぞれの心情が語られている。

> Indeed, his own life was a miracle; let him make no mistake about it; here he was, in the prime of life, walking to his house in Westminster to tell Clarissa that he loved her. Happiness is this, he thought.
>
> It is this, he said, as he entered Dean's Yard. Big Ben was beginning to strike, first the warning, musical; then the hour, irrevocable. Lunch parties waste the entire afternoon, he thought, approaching his door.
>
> The sound of Big Ben flooded Clarissa's drawing-room, where she sat, ever so annoyed, at her writing-table; worried; annoyed.... And the sound of the bell flooded the room with its melancholy wave; which receded, and gathered itself together to fall once more, which she heard, distractingly, something fumbling, something scratching at the door. (129-30)

部屋に音が波のように押し寄せ、あふれる。水のイメージと音の描写が重層的に使われており、情景に寄せて感情を鮮やかに伝える一例である。

鐘の音はここでは、人物描写を切り替え、物語の筋をつないでいる。しかし二人の感情は全くかけ離れている。妻を愛している！と幸福感をかみしめながら街を歩く Richard は、Big Ben の鐘の音を聞いても、ただ時が過ぎたと感じ、パーティの時間は無駄であったと思うだけである。一方、Clarissa にとってその鐘の音は部屋いっぱいにあふれ、憂鬱にさせる。自分の感情を重ね合わせて音を聞き、音が次第に消えていく様子を退いては寄せ、ぶつか

ってはくだける波という視覚的イメージでもってとらえている。ここでは鐘の音は、細やかな感情までも同調させるものではないが、遠く離れた他者を描写するきっかけ[3]として使われている。このようにイメージは音の描写においても効果的に用いられている。次章では、音の効果について更に検討していく。

2．音の機能

Big Ben の鐘の音の描写は、さきほど言及したものの他にも数多い。一時間ごとに鳴る鐘の音だけでなく、15分ごとの小さな鐘の音も物語の筋を交差、展開させる働きをしている。公園で Septimus と Lucrezia が語らっているところに11時45分を知らせる鐘が鳴る。その鐘の音がきっかけとなって、描写の焦点が二人に近づいてきていた Peter に移る。

> "I will tell you the time," said Septimus, very slowly, very drowsily, smiling mysteriously at the dead man in the grey suit. As he sat smiling, the quarter struck – the quarter to twelve.
>
> And that is being young, Peter Walsh thought as he passed them. (79)

先ほどの Richard と Clarissa に聞こえてきた鐘の音より小さい音であり、この場面において鐘の音は Septimus 達と Peter に対して特に何らかの感情を湧きあがらせるものとはなっていない。人物描写を切り替える、あるいは異質の筋の交差を助ける要素として、鐘の音が使われている。

車のパンクの音 (16) も、街に居合わせた人々の注意を惹く。一瞬、意識が一点に集中する。第一次世界大戦後のことでもあり、鋭いパンクの音は人々にピストルのイメージを喚起させている。同様に、飛行機の爆音 (23) もそのうるささに人々は一斉に空を見つめる。人々が心に浮かべる印象や受けた啓示[4]はばらばらであるが、音は偶然その場にいあわせた者が、短い間ではあっても空を見上げ、沈黙して一つのものを見つめる瞬間を生み出す[5]のである。

また、音は人を現実に引き戻す効果ももつ。公園のベンチでの Septimus のまどろみは、岩の上に取り残された水夫であるかのような感覚やボートの端から落ちていくような感覚を生み出すものであった。彼はまどろみから、街のざわめきによって目覚める。

> But he himself remained high on his rock, like a drowned sailor on a rock. I leant over the edge of the boat and fell down, he thought. I went under the sea, I have been dead, and yet am now alive, but let me rest still, he begged (he was talking to himself again – it was awful, awful!); and as, before waking, the voices of birds and the sound of wheels chime and chatter in a queer harmony, grow louder and louder, and the sleeper feels himself drawing to the shores of life, so he felt himself drawing towards life, the sun growing hotter, cries sounding louder, something tremendous about to happen. (77)

恐ろしい夢の中にいる Septimus は、実際に自分を取り巻いている音が聞こえてきて、次第に意識が現実に引き戻されていく。

また、パーティーのために縫い物をする Clarissa は緑色のドレスのひだを集め、ベルトに縫い付ける。その緑色のひだの連想から *Cymbeline* の一節を思い起こし、波の砕ける情景を思い描く。

> So on a summer's day waves collect, overbalance, and fall; collect and fall; and the whole world seems to be saying "that is all" more and more ponderously, until even the heart in the body which lies in the sun on the beach says too, That is all. Fear no more, says the heart. Fear no more, says the heart, committing its burden to some sea, which sighs collectively for all sorrows, and renews, begins, collects, lets fall. And the body alone listens to the passing bee; the wave breaking; the dog barking, far away barking and barking. (44-45)

Clarissa の心象風景において、心は海を思い、肉体は通り過ぎていく蜂の音、

砕ける波音、遥か遠くで吠えている犬の鳴き声を聞いている。心の奥底でこうした音を思っていた Clarissa は、このあと Peter が鳴らした玄関のドアのベルで現実に引き戻される。音は、Peter の夢においても Clarissa の心象風景においても、情景の中で響いていると同時に現実に意識を引き戻す契機ともなって、心象風景と物語の展開をつなぐ役割を果たしている。

さきほど引用したように大地から湧き出す音 (90) も水のイメージと重ねられ、音自体が心象風景に溶け込んで風景そのものを構成する要素の一つとなっている。

おわりに

四種のイメージはそれぞれの特質でもって、心象風景をあざやかに描き、その場面における登場人物の感覚、追憶、意識までも表現する。またイメージを重ね合わせることによって、ばらばらに見える印象に統一感を与え、視覚化する。

音はこうした心象風景に組み込まれ、それぞれの描写を繋いだり切り替えたりして物語を展開させていくと同時に、音そのものも心象に働きかけ、感情と共振している。啓示を与えたり、感情に訴えかけたりする音の効果を受けて、心象表現は広がりと奥行を持ち、意識の深化や他者との交錯が生まれる。The leaden circles dissolved in the air. (6) という文章は Big Ben の鐘の音が鳴り響く表現として繰り返し用いられている。音がまるで波紋のように、空中に溶け広がり、そして消える。はかないものではあるが、鉛とあるようにその余韻は人々に重くのしかかる。このように時の経過をいやおうなく万人に知らせて鐘の音はゆっくり消滅する。人生そのものを思索させ、自分に与えられた時が刻々と失われることを実感させるとともに、感傷的に過去を振り返らせるのである。

ばらばらにも思える印象や描写の断片をイメージで統一し視覚化して、根底に流れる感情や認識そのものを映す心象風景に、音は入り込む。そして情景を縫い合わせたり、切り離す。このようにイメージも音も、多様な意識の

集中や分離、深層意識への下降、現実への覚醒をうながすとともに、イメージでもって音を重層的に表現したり、音が幾つかのイメージを包括して現れ、この二つの要素は互いに小説構成に多大な役割を果たしている。

イメージや音は作品中に散在しているが、最終的にはそれぞれが重なり合い、主題を盛り上げるため重層的に使われている。このようなイメージや音の効果は *To the Lighthouse* や *The Waves* を分析することによって更に明らかになると思われる。この点については、次稿において考察を深めたい。

註

本稿における *Mrs. Dalloway* からの引用はすべて、Virginia Woolf, *Mrs. Dalloway* (London; The Hogarth Press, 1963) 参照。

1　Edward Morgan Forster, *Passage to India* において、すべての音や声を "Boum" の一語に呑みこむ、あの洞窟の場面 (154) を想起させる。

2　Reuben Brower, "Something Central Which Permeated: 'Mrs. Dalloway'." *Virginia Woolf* (10) に水のイメージと海への恐怖についての言及がある。

3　よく指摘されるように、鐘の音は Clarissa と Septimus という、直接に何の関係もない二人の生活を結びつける役割を果たす。Monique Nathan, *Virginia Woolf* (101) 参照。

4　René E. Fortin, "Sacramental Imagery in *Mrs. Dalloway*." *Virginia Woolf Critical Assessments* Vol. III (308) 参照。

5　Jean O. Love, *Worlds in Consciousness* は、周囲の人々の意識を集中させるという、車と飛行機がもつ機能の類似を指摘している (152)。

Works Cited

Brower, Reuben. "Something Central Which Permeated: 'Mrs. Dalloway.'" *Virginia Woolf.* Ed. Harold Bloom, New York: Chelsea House, 1986.

Forster, Edward Morgan. *Passage to India.* London: Edward Arnold, 1964.

Fortin, René E. "Sacramental Imagery In *Mrs. Dalloway.*" *Virginia Woolf Critical Assessments Vol. III.* Ed. Eleanor McNees. Mountfield: Helen Information, 1994.

Love, Jean O. *Worlds in Consciousness.* Berkley: U of California P, 1970.

Nathan, Monique. *Virginia Woolf.* Trans. Herma Briffault. London: Evergreen Books, 1961.

Woolf, Virginia. *Mrs. Dalloway.* London: The Hogarth Press, 1963.